

聖書と私

一

私の聖書との出会いは、もう三十年の昔、日本に君臨した連合国総司令官マッカーサー元帥のある布告の中で「山上の垂訓」という文字を見出し、それが聖書の一部の名称であることを知った折もおり、たまたま中央線立川駅前で絵表紙の新約聖書を買求めた時にさかのぼる。しかしその時は、山上の垂訓のあり場所を確かめた位で読むこともなく終ってしまった。

三重県鈴鹿の海軍航空隊から東京に復員してきた私は、戦後の混乱の中で、生きていくために進駐軍労務者をはじめいろいろの仕事を経験したが、幸い外務省文書課に英文タイピストとして定職を得た。ここにまる二年勤務したが、この間にある同僚に勧められて日本キリスト教団銀座教会の正午礼拝というのに出席するようになったのが、キリスト教に接した最初である。

ここで聖書と私の関係に決定的な意味をもつ二つの事があった。一つは、その正午礼拝で恐らく今の神学大学の前身にあたる神学校

の教授であられた松田明三郎氏のヨブ記連続講義を聴いたことである。話の内容は全然覚えていないが、とに角ヨブ記が私に聖書を読んでもみようという気をさせた第一の書になったことはまちがいない。苦難の問題や神義論など難かしいことは理解する由もなかったが、人生になぜ苦しみがあるか、人の世はなぜこうも不公平なのか、とフンマンやる方ない思いであった私に、この本は何か解決を与えてくれるという予感がしたことは確かである。その四十章七節「なんぢ腰ひきからげて丈夫のごとくせよ」というヨブに対する神のことばが、私にも天啓として鳴りひびいたのはそれから何年も経ってからのことであった。もう一つの出来事は、更に勧められてある日同じ教会の日曜礼拝に出席した折に、渡辺善太牧師の説教を聞いたことである。その話の内容も殆ど忘れてしまったが、テキストはマタイ伝十三章四十四、四十五節の「畑に隠してある宝、高価な真珠」のたとえであった。それまで多分に感傷的な宗教感情に酔っていた私は、自分がいま出会いつつある宗教の深

刻さに恐れと喜びのいりまじった激しい衝撃を受けたのであった。翌る月曜日正午礼拝が終ると私はその足で日本聖書協会に行き、アメリカで写真印刷されたという黒い表紙の旧新約聖書を一冊、当時の私としては大枚を投じて購入し、その晩から決心して一日に十章づつ読むことにした。何分仕事と勉強の苦学生にとつてそれは辛い分辛い日課であったが、四か月程で通読し終った時には、自分はこれからこの本によつて生きようと決意していた。当時外務省職組の活動的委員であり共産党入党までも考えていた私にとつて、これは大きな転換であった。

二

外務省には当然のことながら多くの語学講習会があった。私も昼休みや退庁後などに幾つかの講習に出席していたが、英語では特に当時外務省一等翻訳官であられた現桜美林大学教授岩崎健弥氏に大へんお世話になった。旧制中学を一年で退学し、その後は給仕をしながら夜間中学に通い、志願兵として海軍に入隊し、復員後は戦時特別措置で中央大学の夜間部に入学できたものの生活に追われてロクに出席もできないでいた私にとつて、これはあとにも先にも唯一の正規の英語学習であった。話が横道にそれたが、この岩崎氏のクラスであるとき欽定英訳聖書がテキストに使

われ、その折に同氏旧知の一アメリカ人宣教師が聖書について特別講義をしてくれた。その宣教師がミス・フアーナムで、私はそれから同師の英語バイブル・クラスに出席するようになった。そのうち、同師の属する「キリストの教会」派の神学校入学を勧められ、ちょうど私も前述のように自分の生きる道はキリスト教だと考え始めていた時だったので、直ちにこの勧めに応じ、外務省を辞して東京聖書神学校に入学したのであった。一九四八年四月のことである。そのとき私はわずかばかりの本も全部処分して、文字通り聖書一巻を携えて、赤坂の外務省の寮から東中野の出来たばかりの同校の寮へ移って行った。

それからまる五年、私はこの学校で主としてアメリカ人宣教師から聖書を学び、入学した年の秋からはミス・フアーナムを助けて同師が戦前に始めた教会の牧師として伝道に従事するようになった。「キリストの教会」はいわゆる福音派の一派で、初代教会に復帰すべきことを主張する。その聖書観は聖書の一字一句を神のことばと信じ、その命ずるところをそのまま実行することが真の教会を建設する道であるとする。従って神学校では聖書そのものの勉強がすべてであった。この間に私は文語訳と英訳で多くの聖句を暗誦し、物語としての聖書をほぼ完全に習得し、卒業論

文では、*The Plenary Inspiration of the Bible* と題して聖書の「完全霊感説」を論じた。私の聖書観は学校で教えられたところに全く忠実なものであった。

聖書をどう読むにしても、まず基礎とすることは聖書の内容をよく知ることである。何よりも聖書そのものをよく読むことである。

この点で私は、後に私の聖書観は一変したが、この宗派で学んだことに心から感謝している。特にアメリカ人宣教師の頑なまでに保守的な信仰と、自分の信じたところは決して変えようとしないうる強い生き方とには、賛成はできないながら、敬意を表さざるを得ない。このアメリカ・キリスト教の（一つの）伝統はファンダメンタリズムと呼ばれるが、ベトナム戦争とウォーターゲート事件のあとでカーター大統領が出現した社会的背景には、このファンダメンタリズムを頂点とするアメリカ人の聖書の伝統があることは疑う余地がない。恐らくこれがアメリカという国の健全さの少くも一つの要因なのであろう。

三

一九五〇年代は戦後日本のキリスト教隆盛時代であった。私のような青二才の牧師が語ることに聞こうとする人々がたくさん教会に集った。一所けん命ではあるが、今考えればイイ気になって伝道らしきことをやってい

るうちに、私はいつしか伝道とか牧会とか牧師職というものに疑問を抱くようになった。教会の事業が成功すればする程自分のやっていることが空しく思われてきた。ちょうどその頃に、私は旧友飯島正久氏（港キリストの教会牧師）に勧められて既に購読していた山本泰次郎先生の「聖書講義」を、初めて真剣に読むようになった。さらに先生の雑誌と著書を通して内村鑑三を知り、その著作を読むようになった。自ら伝道までしながら求めに求めて得られなかったものが、今や確かに恵みとして与えられた。それはイエス・キリストの十字架による罪のゆるしの福音であり、その事業をただ信仰のみによって信じる信仰であり、それ以外のことは最早問題にならない。私にやっと平安が臨んだ。信仰の自由が感得されるようになった。

私はこの内なる喜びを何とかして私が責任を持つ教会全体にわかってもらいたかった。しかし、その為に私が試みることはいっさい教会の伝統と衝突し、ついに「異端」ということになって牧師を辞さなければならなくなった。こうして私は牧会六年半にして「教会」を去った。一九五六年の春である。

信仰の一変は私の聖書観にも決定的な転換をもたらした。実は教会を去るかなり前から

私たちは、飯島牧師の首唱・指導のもとに、山本先生のご出講をいただいて「東京聖書会」と称する聖書講座をもっていた。そこで私は神学校で習ったところとは全然別の聖書を学びつつあった。その聖書はもはやそこから「教義」をとり出す六法全書でもなければ、信仰生活を縛る道徳の教科書でもなく、まさに生きた人間の生きた言葉であり、しかもそれは、彼らが何者かに動かされて記したと考へざるを得ない内容のゆえに、まさに活ける神の活ける言であった。

一九五七年の春、私は山本先生が「大いなる民の大いなる歴史を明らかにせる 大いなる学者の 大いなるこの書を呈す」と書いて贈って下さった J. Wellhausen, History of Israel and Judah を読んだ。これが私の聖書研究の出発点となった。ウエルハウゼンは言う。「最初に律法があったのではなく、律法はむしろイスラエルの発展の到達点である」と。これを聖書全体にあてはめて、私の言葉で言うところなる。聖書は神があたかも隕石か何かのように天から人間に降した書物（ファンダメンタリストの聖書観）ではなく、どこまでもイスラエル民族の民族文学であり、初代クリスチャンの信仰文学である。それが神の言であるゆえんは一にその内容にある。即ち聖書記者たちは普通の人間として普通の

言葉をもって聖書を書いた。だがそれにもかかわらず、聖書を読む者は等しくそこに人間を超えたものを感じざるをえない。それは聖書じしんが主張するように、聖書が「すべて神の靈感を受けて書かれたもの」であり、それのみでなく、聖霊は永遠の存在であるゆえに聖書が今なお神の靈感の書であるからである。従って聖書を読む者は聖書が a book にすぎないことをしつかりわきまえるとともに、それがなに故に、またいかなる意味で the book であるのかを自らのこととして探求していかねばならないのである。

この聖書観は内村鑑三の無教会主義、即ち神が形を生むのであって、形が神を規制するのではないという考え方に全的に呼応するものである。こうして私は信仰を一変させられるとともに、聖書を全く新しく読むようになった。

四

信仰の自由は私を聖書を自由に読むことへと導いた。こうして読んでみると、聖書は実に本当の意味で「大学」である。そこには宇宙の真理が語られ、「知恵と知識との宝が、いつさい隠されている」。およそ読書などというものに無縁な環境に育った私であるが、ここに初めて学問することの喜びを知った。学問とは事実を尊重すること、正しく疑うこ

と（批判）、もの事に対して公正であること、であろう。そして私にとって学問することは聖書を学ぶことであった。

いずれも入門の域を出るものではないが、私は英訳聖書で英語を勉強し、次いでギリシア語とヘブライ語を学習した。聖書を原典で読む楽しみは、私が次第に英語を教えることを職とするようになったことと相俟って、私に言語そのもの、あるいは言語学に対する深い関心を抱かせた。また聖書の背景を知りたいという願いから中東の地理を学び、古代オリエントの歴史をひもといた。聖書に展開される人間模様は、当然のことながら、私に文学とか心理学に対する興味を喚起したし、聖書の社会的側面は、私に法律や経済、あるいは政治や国家の問題を考えさせ、社会科学への目を開かせることになった。聖書と共にあるとき、私の知的興味と生への関心は無限に拡がってどまるところを知らない。

こうした聖書の勉強は、前述の東京聖書会の講座とともに始まった。別に勉強の方法を教えられたわけではないが、勉強の精神と勉強せずにはいられない思いとを注入されれば、もうそれで充分であった。あれから二十年余、私がともにも角にも聖書の勉強をつづけ、またわずかながらもその成果を友人たちと頒ち合っていくことができたのは、あの頃の勉強の

おかげである。山本先生と、いまなお各地で福音の為に働いている当時の学友たちに感謝なきを得ない。

大分のちのことであるが、私は機会を得て慶応義塾大学の通信教育を受講した。それは直接には英語教師として一度は正式に英語を学んでおかねばならないという義務感からであった。そして幸いに、欽定英訳聖書の英語についての小論を書いて卒業することができた。自分の関心にまかせてあれこれと乱雑に学んできた独学者にとって、さすが大学の教育は広範で体系的で、これまで勉強したところを総括するという意味で非常に有益かつ有意義であった。しかし同時に、私が聖書だけで勉強してきたところを超えて新しい問題や分野を提示されたということはなかった。むしろそこで習うところはすべて聖書の中に既に内包されている事柄のみであった。もう一つ大学での勉強で気がつかされたことは、聖書がその知恵と見識と洞察において、いかに現代的な性格とメッセージをもっているかということである。これらのことはすべて当然と言えば余りにも当然のことであるが、私にとっては聖書と私の関係を一層豊かにする大きな出来事であった。

五

聖書は一つの歴史的文献である。従って聖

書はまず歴史的・言語的に研究される必要がある。聖書学と呼ばれる学問はそれである。

聖書学には文献学をはじめ、およそありとあらゆる分野の学問が動員され、それはこんなに驚くべき発達をみている。恐らく聖書ほどに厳密な科学的検討を加えられてきた研究対象はほかにないだろう。また聖書は一つの傑出した文学作品である。純文学の世界に聖書が与えてきた大きな影響については、いまさら多言を要しない。文学としての聖書は、時間と場所を超えて、人間とは何かを豊かに開示する。文学としての聖書の世界は、いわば無時間的真理の世界であるから、実に多様で多彩で、しかも深刻透徹、滋味尽きるころがない。日本語の聖書は英語を除けば世界で最も販売部数が多いというが、日本人の多くは聖書を文学的に読んでいたのである。

しかし聖書には、もう一つそれなくしては聖書でありえない大切な性格がある。言うまでもなく、それは宗教の古典、キリスト教の正典としての聖書、もつと端的な言い方をすれば神の言としての聖書である。そこに聖書を一貫する聖書の中心的使信が秘蔵されている。そして人がひと度この奥義に開眼するとき、彼はもはや聖書を歴史的文献として研究し、文学者として鑑賞することにとどまることはできない。なぜなら聖書は今やその中心

的使信をもって彼に絶えず深刻な問いをつきつけ、彼の明確な応答と決断とを迫ってやまないからである。この厳しく激しい精神の作業の中で、聖書は彼にとって a book から the book へと変容していくのである。聖書を読むということは、ここに到って、実に人間にとつて最高に実存的な営為である。

聖書に出会って三十年、幸いに私もまたこの圧倒的経験を日々自らのものとして生きてくることができた。そして聖書に初めて出会った時受けたあの「恐れと喜びのいりまじった激しい衝撃」を、今なお私の靈魂の奥殿に一層に強く、一層に深く、一層に広く感じつつ、私もまたヘブライの詩人とともに感謝の歌声をあげる。

主のおきては完全であつて、魂を生きか
えらせ、

主のあかしは確かであつて、無学な者を
賢くする。

主のさとしは正しくて、心を喜ばせ、
主の戒めはまじりなくて、眼を明らかに
する。

これらは金よりも、多くの純金よりも慕
わしく、

また蜜よりも、蜂の巣のしたたりよりも
甘い。

(一九七七年四月二十五日記)

(所載) 『テコア聖書集會 二十周年文集』

一九七七年四月